

実践報告

専門職大学院における「ディベート的討議演習」(その3)

— ディベートの教育的有効性とその実際 —

花田 修一¹

本稿は、平成18年度から平成21年度の4年間にわたるわが大学院の「ディベート的討議演習」(通年)の授業内容を中心に記述したものである。本授業では、次のような演習を行ってきた。①インナースピーチ、②ペアトーク、③グループディスカッション、④ロールプレイング、⑤ディベート、⑥パネルディスカッション、⑦シンポジウムである。本稿では、⑤ディベートの実践を中心に報告する。

ディベート(debate)は、一般に「討論・論争」と訳されている。アリストテレスの修辞学を基礎とし、1400年代初期に、オックスフォードとケンブリッジの間で行われ、イギリスでは政治家の必修プログラムとなっている。アメリカでは、1800年代後半に始まったと言われる。日本においては、英語によるディベート大会から始まり、戦後、大学対抗なども行われた。教育界においては、1990年代に入って、国語科や社会科や英語科や道徳などの授業で少しずつ実践されるようになってきた。それはこの20年来、学校教育に強く求められている論理的思考力や論理的表現力、言語活動、情報や資料の活用能力などの育成に寄与できるという教育的効果が認められるからである。

では、そのディベートの授業をどのように行ったか。以下、講義用ノートや学生の発表資料などを基にして実践報告をしつつ、その教育的有効性を一層明らかにし、教師育成のための専門職大学院教育における「ディベート教育」の実践的研究開発の一助としたい。

キーワード： 討論、言語活動、論理的思考力、論理的表現力、情報活用能力

I 本授業の概要

1 本授業の目的

本授業は、本学を修了後、中学校及び高等学校の教師をめざす学生を対象として開講したものである。授業では、優れた教師になるための「ディベート的討議法」の基本的・応用的な実践的活用能力を一層高め、自らの人間的素養や資質をさらに高めること。また、多様な討議法の歴史や理論や実践に学び、これからの中学生及び高校生に対して、様々な問題を発見し、解決できる力を身に

1 日本教育大学院大学 学校教育研究科

付けさせることができる指導力や授業力を高めることを目的としたものである。

2 本授業の方法と計画

前期は、前述した様々な「ディベート的討議法」の理論的・歴史的・実践的経緯を受講者各自が分担して調べ、考察し、報告することを中心とした。その報告に対して、受講者同士で質疑応答や討議を繰り返し、必要に応じて授業担当の筆者が助言・指導を行うという方法をとった。後期は、前期で学んだ内容を全員が「模擬授業」という形態を通して発表した。それに対して、受講者同士で相互評価をし、討議を重ねるという実践的教育方法の開発を行った。

3 本授業の評価

本授業における評価は、出席率(30パーセント・講義ノートへの記入と毎時間の評価反省の記述)、レポート(20パーセント・夏季休暇中の学習指導計画書)、模擬授業と討議への参加(30パーセント)、定期試験(約20パーセント・前期及び後期の筆記試験)などを総合的に判断して評価した。また、この成績評価については、最初の授業で学生に明示した。

なお、「ディベート的討議法」に関する受講者の経験とその内容や学校における「ディベート的討議法」の教育的意義については、「教育総合研究」第1号(2008年)の拙稿 pp.50-51 を参照いただきたい。さらに、本科目に基づくインナースピーチとペアトークについては、『教育総合研究』第1号(2008年)で、ロールプレイングについては、第2号(2009年)で報告したので、参照いただきたい。

II 「ディベート」の教育的有効性とその実際

1 「ディベート」の教育的有効性

「ディベート」がなぜ、学校教育にとって必要なのか。それは、ある論題(テーマ)に対して、肯定(賛成)と否定(反対)の立場に分かれて討論をすることにより、論題に対する自己及び他者の認識を深めたり、変革したりすることができるという教育的有効性が認められるからにほかならない。中学生や高校生は、その精神的発達から自己の考えや認識が偏見や独断に陥りやすいという傾向がある。それはまた、その時期における彼らの特徴でもある。様々な論題に対して、それぞれの立場や視点などがあることを、ディベートという意義ある言語活動を通して、論理的思考力や表現力、情報活用能力、認識の深化や拡充・変革や目的・場面に応じた適切な表出法をも学ばせることが可能であると考えられるものである。

2 「ディベート」の授業の実際

(1) 「ディベート」の定義や教育的意義についての話し合いとその考察

次に示すのは、受講者のAとBとが協同して作成した「ディベート」に関する基礎知識のワークシートの一部である。(縮小して添付する。実物は、A4判1枚である。)

<h2>ディベート (Debate) について</h2>	木曜6限 ディベート的討議演習
	平成21年6月11日 発表者
<ディベートとその方法>	
ディベート…あるテーマに対して、_____側と_____側に分かれて_____すること。 判定は審判団が行う。_____を決めるものである。	
方法	…① 論題を決める。 ② 情報(事実、データ)を集める。 ③ 論理を組み立てる。 ④ 討論(準備→{肯}立論→{否}立論→作戦タイム→{否}反対尋問→作戦タイム →{肯}反対尋問→作戦タイム→{否}最終弁論→{肯}最終弁論→判定と講評)を行う。
<用語>	
論題	…ディベートのテーマ。
肯定側	…論題に対して_____する立場。
否定側	…論題に対して_____する立場。
立論	…自分の立場を_____を挙げて_____すること。
反対尋問	…相手側に対して行う_____とその_____。
最終弁論	…立論や反対尋問をふまえて行う_____のこと。

また、参考文献として次のものを紹介している。

- 花田修一『国語科ディベート授業入門』第4版 1955 明治図書
- 花田修一『生きる力を育む「話し言葉」授業の改革』初版 1997 明治図書
- 全国ディベート連盟『学校行事・部活動で楽しむディベート実践ガイド』第2版 2001 学事出版
- 全国ディベート連盟『中学校・高等学校 ディベート授業がてがるにできるモデル立論集』第2版 2003 学事出版
- 田中孝一『高等学校 新教育課程の授業と評価 国語』初版 2005 学事出版
- 全国ディベート連盟『中学・高校 はじめてのディベート授業 教材を活用したディベート実践ガイド』第2版 2006 学事出版

これらを整理して、受講者のAとBは、ディベートで育成する力として次の6項目を発表した。

- 論理的思考力、○ 自己表現力、○ 聞く力や態度、○ 評価力や批判力、○ 学び合う喜びや学ぶ意欲、○ 情報収集力や活用能力

なお、筆者は、ディベートで育てる習得型学力（基礎的な知識や基本的な技能）について、次の5つの観点から補足説明をした。詳しくは、拙稿「ディベートで活用型学力を育てる」『教育科学 国語教育』（2009年7月号 PP.117-121 明治図書）を参照いただきたい。

- 1 興味・関心・意欲に関する学力（ディベートに対する情意的・知的好奇心などに対する学力である。）
- 2 基礎的な知識や基本的な技能に関する学力（立場を明確にして話す力、論理的な構成で立論を述べる力、理由や根拠を明確にして論理を展開する力、肯定側と否定側の相違点を的確に聞き分ける力、資料を効果的に活用する力、話す速度や間の取り方や言葉の使い方などを工夫して説得力のある話し方をする力など、17項目を挙げた。）
- 3 実践的な活用に関する学力（習得した知識や技能を実践的にいかに活用するかという学力。いわゆる演習や模擬授業などに当たる学力である。その事例として、「学校の自動販売機のジュースは値下げすべきである」という論題による中学1年生を対象としたディベート授業の報告をした。）
- 4 素地（言語機能）に関する学力（論題の適否について吟味し判断する力、論題にふさわしい情報や資料などの信憑性を吟味し判断する力、立論や反対尋問や反駁や最終弁論などに表れる見方や考え方をとらえ自分の認識を深める力など、8項目を挙げた。）
- 5 学習法や評価法に関する学力（ディベートの方法、判定の仕方、自己評価法や相互評価法などに対する学力である。）

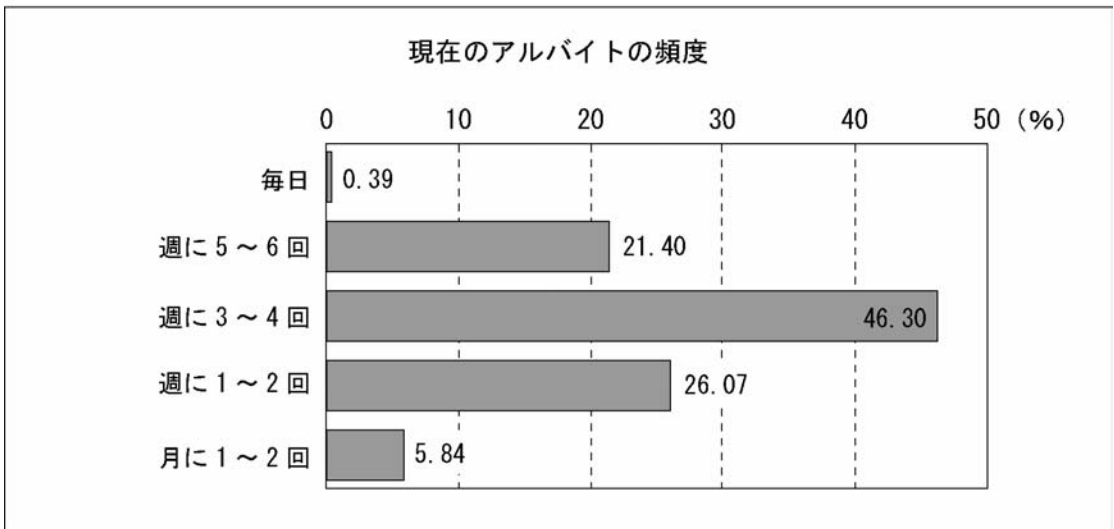
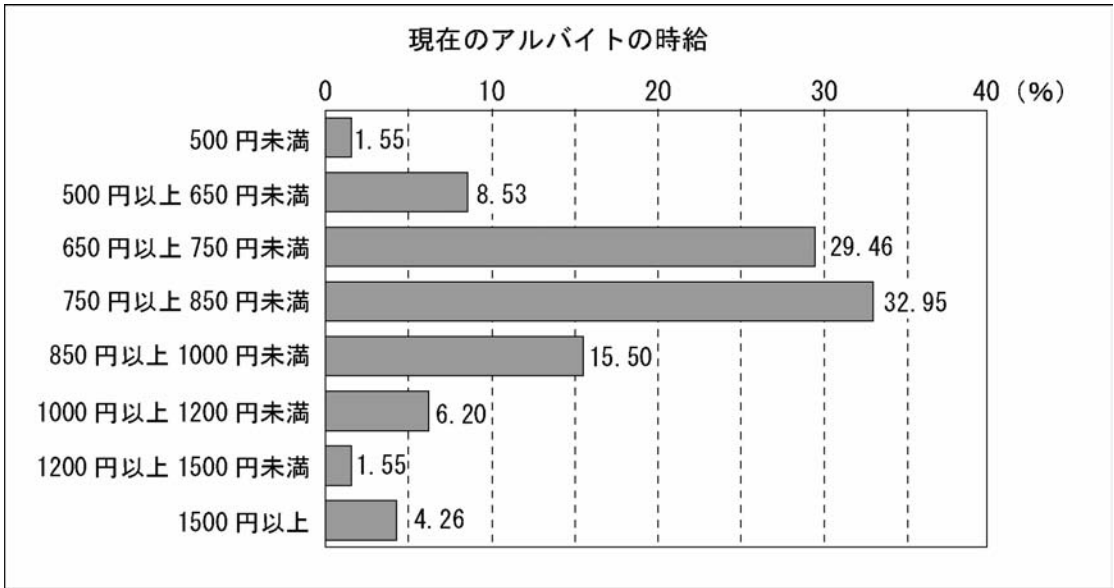
学校教育におけるディベート学習は、まず身に付けるべき学力を指導者が明確に把握して行うことを受講者に強調した。そのために、筆者は前述した「ディベートで育てる学力」を5つの観点から補足説明をしたのである。学力の的確な把握は、ディベートに限らず、すべての教科や科目などにおいても同様であることを受講者に話した。

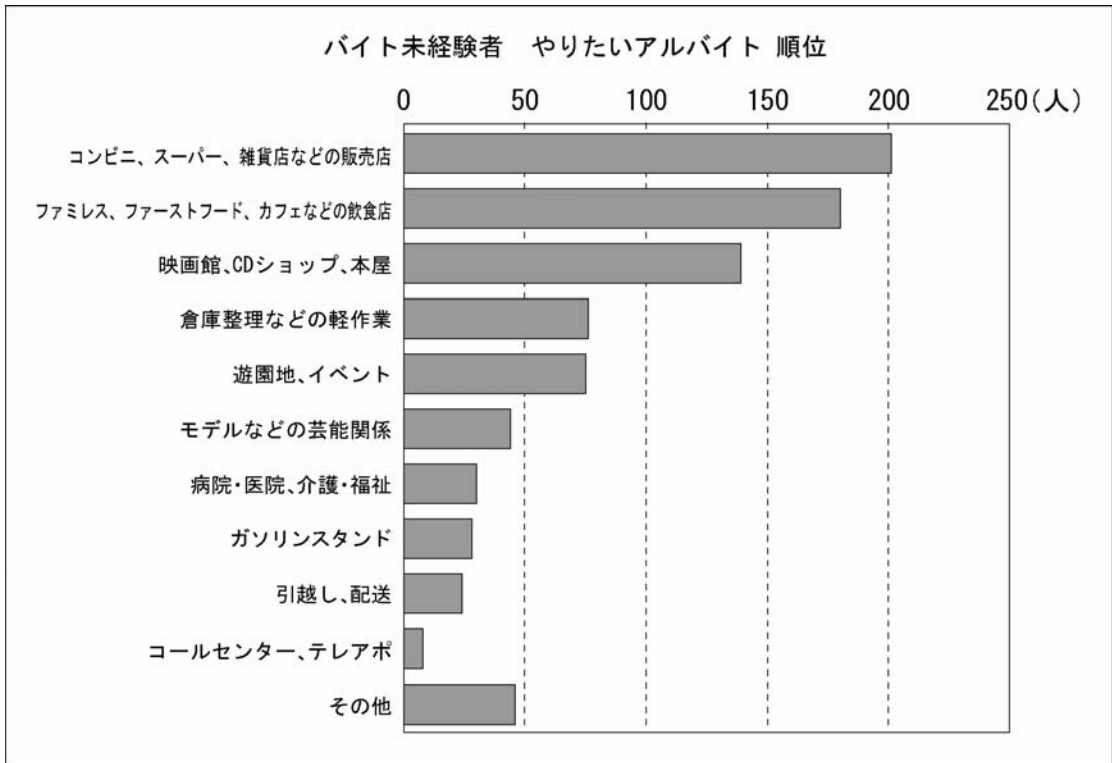
（2）「ディベート」の授業の展開とその実際

次に示すのは、受講者のAとBとが、実際に模擬授業として演習をしたものの一部を整理したものである。

- ① 論題：高校生のアルバイトは認めるべきである（高校2年生対象）

AとBは、事前に、次のような参考資料を配布して、このディベート模擬授業に対する受講者のモチベーションを高めようと工夫した。

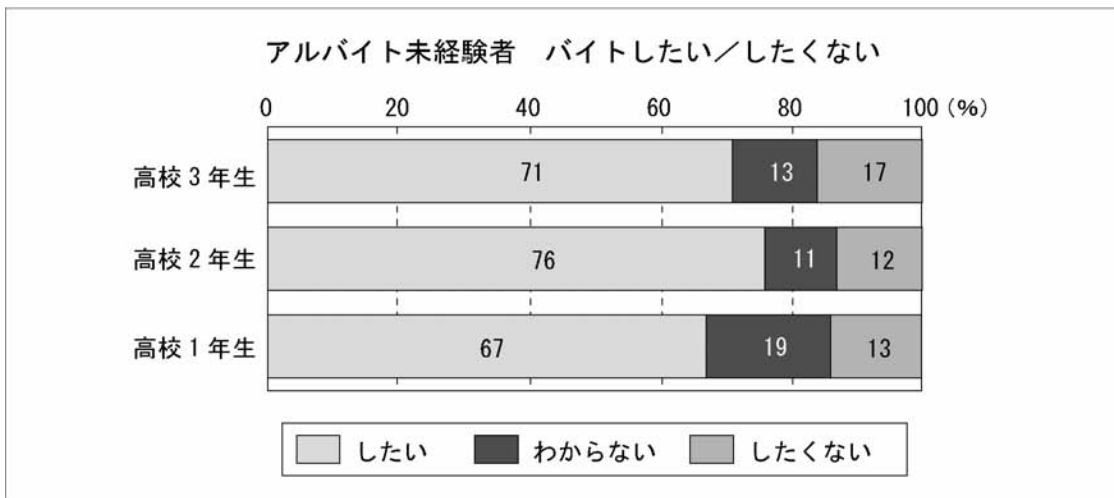
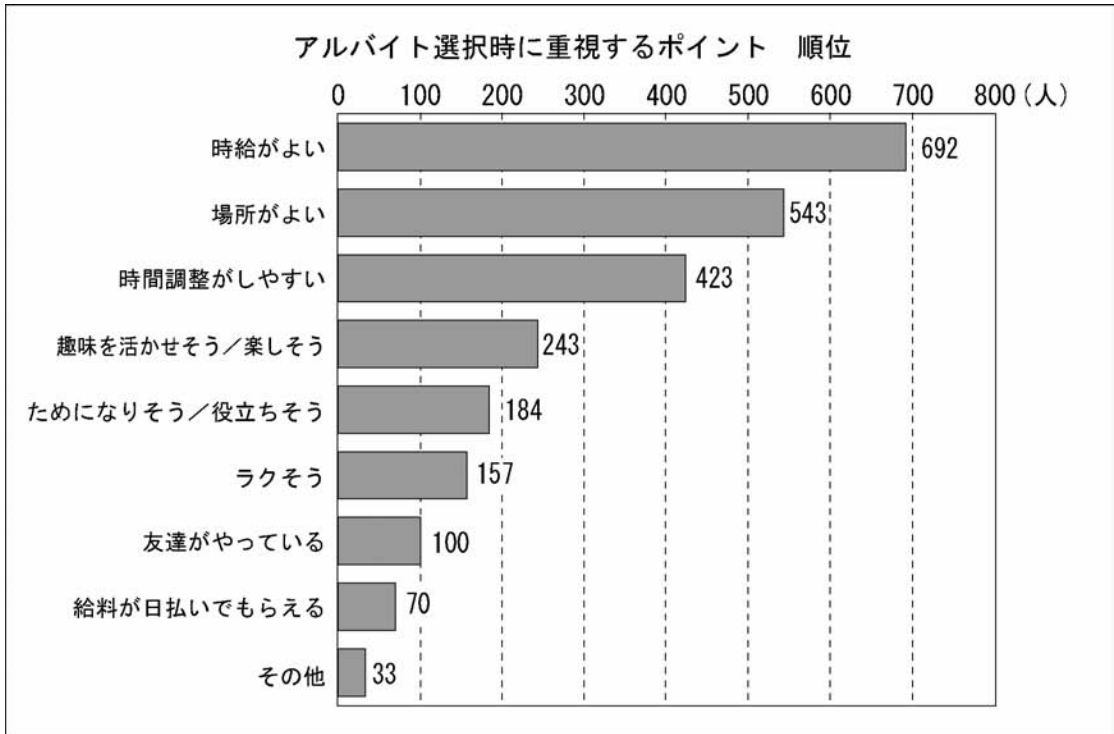




■調査概要

- ・設問項目 : ①今なにかのアルバイトをしている？(1つ選択)
 ②「バイトしてる」と答えた人へ質問。今どんなバイトしてる？
 ③「バイトしてる」と答えた人へ質問。今やってるバイトの時給は交通費込みでいくらくらい？
 ④「バイトしてる」と答えた人へ質問。今やってるアルバイトは週に何回くらい入るの？
 ⑤今度は「バイトしてない」人に質問。今バイトをしたいと思う？
 ⑥「バイトしたい」と答えた人へ質問。今どんなバイトをしたい？
 ⑦全員に質問。バイトを選ぶときに重視するポイントってなに？
 ⑧アルバイトを探すときはどこで探す？
- ・調査方法 : 携帯サイト「GAMOW」会員向け特別ページにおけるクローズド型調査
- ・調査対象者 : 「GAMOW」会員、全国16歳～18歳の男女
- ・調査期間 : 2007年4月11日(水)
- ・有効回答数 : 841人
 年齢 : 16歳/10%、17歳/45%、18歳/45%
 性別 : 男性25%、女性75%
 キャリア : NTTドコモ/38%、au/47%、Softbank(vodafone) : 15%

また、模擬授業の当日、AとBは、次のような高校生のアルバイトに関するアンケート調査の資料を配布した。全部でA4判6枚になるが、紙幅の都合でその調査結果の概要だけを引用する。肯定側と否定側のチームは、それぞれの立場の意見を支える理由や根拠の一端とした。



② 模擬授業の展開（全90分）

- 1 準備（約10分）……論題を確認し、肯定（是）側と否定（非）側とにチームを分け、コーディネータやタイムキーパーなどの役割分担を決める。
- 2 立論の構成（約20分）……肯定側と否定側とに分かれ、それぞれの立場の意見を支える理由や根拠をまとめる。その際の論点を、「勉学」「経済」「社会性」の3点に焦点化する。
- 3 ディベート討論会（正味50分）……コーディネータとタイムキーパーの進行に従って、次の手順で行う。
 - 肯定側の立論（5分）……アルバイトは是であるという賛成意見を述べる。
 - 否定側の立論（5分）……アルバイトは非であるという反対意見を述べる。
 - 作戦タイム（5分）……それぞれの尋問を作成し予想と応答の準備をする。
 - 否定側の反対尋問（5分）……肯定側に対する疑問や問題点を尋問する。
 - 肯定側の反駁（5分）……否定側の反対尋問に対して反駁する。
 - 肯定側の反対尋問（5分）……否定側に対する疑問や問題点を尋問する。
 - 否定側の反駁（5分）……肯定側の反対尋問に対して反駁する。
 - 作戦タイム（5分）……立論や反駁をふまえ最終弁論の論理を組み立てる。
 - 否定側の最終弁論（5分）……論理の組み立てに従って反対意見を述べる。
 - 肯定側の最終弁論（5分）……論理の組み立てに従って賛成意見を述べる。

4 ディベート討論の判定と講評を行う。（約10分）

5 肯定側立論の実際

肯定側は、「高校生のアルバイトは認めるべきである」と主張します。

そのメリットを述べます。アルバイトを経験することで「社会性が高まる」ということです。次の二点について強調します。

一点目は、社会のルールを知ることができるということです。アルバイトでも、働く以上は社会に参加することに変わりはありません。社会やアルバイト先の会社のルールを守るという責任が課せられます。例えば、「オールアバウト」には、面接時や退職時のルールが示されています。引用します。

面接時のルール「①約束の時間に遅刻をしない。②やむをえず面接に行くことができなくなったときは、必ず連絡をする。」、退職時のNG「①何も言わずに会社（お店）に行くのをやめる。②今日で辞めるなどの突然退職する」。引用を終わります。

このような社会や会社のルールを、働く中で、または雇用者とのやりとりで実際に知ることができるのです。

二点目は、いろいろな人たちに接することができるということです。例えば、スーパーのレジなどでは、お客さんが混雑する時間には限られた人数で対応することになります。さまざまな年齢や嗜好の人たちとの接客で「対応する力」が身に付きます。

昨今、若い世代は対面型のコミュニケーションが苦手だと指摘されています。そういう私たちにとって、以上のような対面型の人間関係を経験することで社会性を高めていくことは、きわめて重要なことなのです。

これで、「高校生のアルバイトは認めるべきである」という、肯定側の立論を終わります。

6 否定側立論の実際

否定側は、「高校生のアルバイトは認めるべきでない」と主張します。

アルバイトから生じるデメリットは、「生活が乱れる」ということです。なぜ生活が乱れるかについて、アルバイトをする高校生と雇用者の両面から説明します。

一つ目は、収入が目的であるということです。求人情報や人材紹介サービス会社インテリジェンスによれば、高校生のアルバイトの目的は、「一位はお金が欲しかったから、二位は働きたかったから」というように、収入を得ることがいちばん多いのです。多くのお金を稼ぐために、勤務時間をどんどん増やす人が多数いるということです。また、お小遣いや高価な買い物にそのお金を使い、そういうレベルの消費生活に陥る羽目になりがちです。そうして、そういうレベルを維持するために、長時間勤務を続けるか、さらに勤務日数を増やすかということになります。こうして、生活リズムがアルバイト中心となって乱れていくのです。

二つ目は、雇用者にとっては、アルバイト高校生は「便利な労働力である」ということです。お金が欲しい高校生と手軽な労働力が欲しい雇用者との考えが一致し、アルバイトの高校生が同意すれば、雇用者はどんどん勤務時間を増やしていきます。つまり、需要と供給の一致にアルバイトの勤務時間を増やす要因があり、生活が乱れていくのです。

実際に、アルバイトのために学校生活に関心が薄れ、進級などにも影響が出ているという友人を知っています。生活が乱れることで、その人数も増えて問題も深刻になります。生活が乱れる原因となるアルバイトを認めるのは、高校生にとって、本末転倒なのです。

これで、「高校生のアルバイトは認めるべきでない」という、否定側の立論を終わります。

7 否定側反対尋問の実際 (一部引用)

否定側：肯定側は「アルバイトの経験は社会性が高まる」と主張しましたが、結局は、雇用者に上手に使われるということになりませんか。

肯定側：立論でも言ったように、会社のルールに従ってきちんとした契約を結ぶことができます。採用時に雇用者ともよく話し合うことができるので、心配はいりませんよ。

否定側：時には変なお客もいますが、高校生でちゃんと対応できるのでしょうか。これまでもアルバイトの高校生が被害にあうという事件も起きていますが・・・。

肯定側：絶対大丈夫とは言えませんが、今は、高校生だけに接客をさせないお店が増えていきます。

否定側：社会性が高まるというのは、接客の相手によるものではありませんか。

肯定側：例えば、スーパーのレジでは、様々な年齢や職業の人と接します。高校生が苦手な対

面型のコミュニケーション力が自然に身に付いていくと主張したとおりです。アンケート調査によると、約30パーセントの高校生が「視野を広げるためにアルバイトをする」と答えています。

8 肯定側反駁の実際（一部引用）

高校生のアルバイトにしても、今は、雇用者側にもきちんとした労働時間などが義務付けられています。ですから、否定側が言うような心配は不要です。また、アルバイトを通していろいろな大人の方に接することができます。言葉の使い方や人に接する時の好ましい態度などが身に付き、少しずつでも成長していきます。このようなことは、学校では経験できません。社会にとび出すことで、社会人としてのルールやマナーなども学ぶことができます。アンケート調査にもあるように、すでに60パーセントの高校生がアルバイトの経験をしており、これからアルバイトをしたいという人も80パーセントを越えています。否定側の質問には、現在の高校生の実態を考えていないと思います。私たちは、高校生のアルバイトには賛成なのです。

9 肯定側反対尋問の実際（一部引用）

肯定側：否定側は「アルバイトは生活が乱れる」ということを強調しましたが、自分がしっかりして働けば乱れることはないではありませんか。

否定側：お金を稼ぐために勤務時間を増やし、睡眠時間や勉強する時間が減って生活のリズムが不規則になるという実態が報告されています。

肯定側：高校生のアルバイトは本末転倒と否定側は言いましたが、働くことはよいことではありませんか。

否定側：高校生の労働を否定はしていません。ただ、アルバイトをされていて生活が乱れ、中途退学をした例もあるということです。

肯定側：生活時間や勉強の計画をしっかりと立ててアルバイトをすれば自立心も育ち、労働の尊さなども実感できてよいではありませんか。

否定側：すべての高校生がそのような人とは限りません。アンケートにも表れているように、アルバイトの目的を「普段の小遣いを稼ぐため」が85パーセントもあります。お金のために働くのは、社会人になってからでもよいと私たちは考えています。

10 否定側反駁の実際（一部引用）

高校生の本分は勉強にあります。また、学校では部活や生徒会活動などを通して先生や先輩など年上の人から学ぶこともできます。肯定側が質問した「働くこと」に私たちは反対をしているわけではありません。もし、そういう時間があれば、ボランティア活動や環境や福祉活動などに汗を流せばよいと考えます。お金をもうけることが高校生の仕事ではないのです。肯定側はアルバイトで自立心が育つと言いましたが、それは、アルバイトだけとは限りません。学校生活や家庭生活などでも自立心は十分に育てることができます。アルバイトに精を出すよりも、まずは目の前の勉強に力を入れること、そして学校生活を中心に青春を大いに楽しむこと、

部活や生徒会や委員会や体育祭や文化祭などで友情を育てたり深めたりすることに力を入れたいと思います。

11 否定側最終弁論の実際 (一部引用)

これから「高校生のアルバイトは認めるべきである」という論題に対する否定側の最終弁論を行います。私たちの立場は、「高校生のアルバイトは認めるべきではない」、反対であるという意見です。理由を三つ述べます。

最初に、規則正しい高校生活を送るためにはアルバイトはリズムを壊すということです。部活やボランティアや予備校などに通っている人には、アルバイトをする時間がありません。無理をしてアルバイトをするとからだを壊すかも知れません。

二つ目は、肯定側の質問にも応えましたが、お金のために働くのは社会人になってからでもよいという理由からです。授業料や必要な学費などは親が出しますし、お小遣いなどは、無駄遣いをしないで最小限にすればよいのです。これはなにもストイックに生活をしようという意味ではありません。高校生らしく健康に生きようということです。

最後に、アルバイトは、雇用者側の論理に陥りやすく、高校生の本分である勉強にも支障をきたしやすいということです。これは、お金がからんでいるからです。人はだれでもお小遣いを増やしたいし、お金が欲しいのです。しかし、その欲求に目がくらみやすいのも高校生なのです。安易なアルバイトで、身を減ぼすようなことがあってはいけません。

以上の三つの理由から、私たちは「高校生のアルバイトは認めるべきでない」という主張をします。これで、否定側の最終弁論を終わります。

12 肯定側最終弁論の実際 (一部引用)

これから「高校生のアルバイトは認めるべきである」という論題に対する肯定側の最終弁論を行います。私たちの立場は、「高校生のアルバイトは認めるべきである」、賛成であるという意見です。理由を三つ述べます。

一点目は、立論でも述べたように、社会のルールを知ることができるということです。学校の中だけでは分からない実生活の様子も見るができるし、さまざまな経験を通して人間的にも成長するというメリットがあります。これは、実際にアルバイトをした友人達の多くが言っています。

二点目は、反駁でも述べたように、雇用者との労働時間などもきちんと定められていて、安心して働くことができるということです。否定側が主張する「からだを壊す」ということはないはずで、むしろ、働くことの大変さや喜びを身をもって感じることもできるのです。勤労の尊さなどを学ぶことができます。

三点目は、お金の大切さを実感できるということです。親からお小遣いをもらっているだけでは、お金の価値は分かりません。汗を流して働くことで収入を得ることのほんとうの意味が理解できるのです。働いて得たお金は無駄遣いをしないものです。お金のほんとうの価値が分

かるからです。アルバイトをすることで、生きるためには働いて収入を得るという貴重な経験ができます。

以上の三つの理由から、私たちは「高校生のアルバイトは認めるべきである」という主張をします。これで、肯定側の最終弁論を終わります。

13 ディベートの判定表

次に示すのは、模擬授業で使った判定表の一部である。

ディベート判定表			
点数→とてもよいー3点、 ふつうー2点、 もう少しー1点			
	評価基準	肯定派	否定派
立論	立場を踏まえた発言ができていますか	点	点
	筋道は通っているか	点	点
	話し方や態度は適切か	点	点
反対尋問	筋道の通った質問をしたか	点	点
	筋道の通った応答をしたか	点	点
	活発に議論ができたか	点	点
最終弁論	反対尋問の質問・意見を反映できているか	点	点
	立場が変化していないか	点	点
総合印象	チームで協力しているか	点	点
	発言者がかたよっていないか	点	点
合計点数（30点満点）		点	点

● 討論を通して納得したのはどちらの主張か、○で囲みましょう。
【 肯定派 ・ 否定派 】

● 判定理由

(3) 「ディベート」授業の学習指導案例

次に示すのは、「日本は死刑制度を廃止すべきである」という論題で模擬授業を行った受講生Cの学習指導案である。一部引用する。

ディベート的討議演習 学習指導案

指導 花田修一教授
授業者

1、単元名 話し合う「立場を決めて話し合おう」

論題「日本は死刑制度を廃止すべきである。」

2、指導学級…（想定）校種：中学校3年

生徒の様子：クラス全体が明るく積極的で、各自が自分の意見を持っている。しかし、発問等で指名しようとすると消極的となってしまう。女子は全体的におとなしいが、男子の一部には授業に集中できない生徒もいる。

3、教材について

- (1) 単元設定の理由（教材観）：世界的にさまざまな制度・見解が示され、社会的に関心の高い話題である。現状、死刑制度が施行される日本において、本討議を行うことで、討議能力の他、生徒の社会的関心を高められると期待される。
- (2) 指導観：極端な論題をあえて討議することで、討議に対して真剣に取り組み、自分の意見や考えをまとめることや、筋道を立てて話す能力を伸ばすことができる。また、肯定側・否定側とも、意見をまとめる際に、根拠となる文献の有効的な活用が求められる。

4、指導目標

- (1) 価値的な目標、関心、意欲に関わる目標
極端な論題に取り組むことで、根拠ある発言が求められ、事前準備や資料収集、意見集約、立論などの力を伸ばす。
- (2) 言語事項に関わる目標、関心・意欲に関わる目標
話し合いや討議を通じて、「話す」「聞く」の能力を高め、生徒の論理的思考の育成を目指す。

5、学習指導計画（四時間扱い）

第一時…シナリオ集を用いて、基本的なディベートの形式を学び、発言時のきまりやルール、流れなどを理解する。

第二時…生徒に学習の内容、手順を示し、肯定派・否定派を教師の指示で分ける。各派を4人のグループで編成し、次回までに論拠となる情報を収集し、各自まとめてくる。

第三時…肯定派・否定派に分かれて話し合い、意見をまとめた後、「立論」をまとめ、反駁点や質疑を想定する。

第四時（本時）…前時にまとめた立論に従いディベートを行う。※本時は既成のディベートの立論を使用する。

×				
	学習活動		学習内容	指導上の留意点・評価
導 入	本時の概説（5分） 前時の引継ぎ		肯定派、否定派、司会者、審判を決める。 代表者は討論の準備をする。	全員が準備を整えてきたか。 適切にグループを編成できるか。
展 開	討論 (40分)	各派立論 (約6分)	各派ごと4分ずつ代表者が前に出て立論を行う。 相手側の主張のメモを取る。 自分たちの論の不備を確認する。	各自相手の主張のメモを取ることを指示。 聴衆もきちんと聞いているか確認。 司会者・審判の作業確認。
		作戦タイム 1（3分）	相手の論を踏まえて質問点や自分たちの主張の 補強点を確認する。	各派のメンバーが協力しているか確認。 発表者への意見集約ができていないか確認。
		各派質疑 (4分)	否定側代表者が肯定側に質問する。 肯定側代表者が否定側に質問する。	立論の時と逆の順番で質問させる。 質疑内容を適切に理解できているか確認。
		作戦タイム 2（3分）	反駁に備えて、質疑で指摘された点の反論や、自 分の立場をより強く主張できる組み立てを工夫 する。	立論、質問を踏まえ、反駁のための意見集 約ができていないか確認する。
		各派反駁 (6分)	相手側立論、質疑を踏まえ、各派が反駁する。 反駁内容をメモし、最終弁論に備える。	質疑を踏まえた反駁になっているか確認。 立論の強調になっているか確認。
		作戦タイム 3（3分）	最終弁論に備え、これまでの経緯を踏まえて相談 し、自分の立場の主張をまとめる。	最終的な評価に繋がることを指示。 立論からの経緯を踏まえるよう確認。
		最終弁論 (6分)	これまでの経緯を踏まえ、最終弁論をする。 審判を説得できるような「弁論」を行う。	立論、質疑、反駁を踏まえた内容になっ ているか確認する。
ま と め	ジャッジ （5分） 講評 （5分）	審判は討論についての評価をまとめ、判定する。 討論者は互いに握手する。 司会は審判とともに講評をする。	討論内容、反駁などでポイントとなった点 を指摘し、学習者の理解を助ける。 全体の講評を通じ、次回への助言をする。	
<p>・討論の進め方がわかったか。</p>				

論題「日本は死刑制度を廃止すべきである」 司会者用原稿

司)これより、「日本は死刑制度を廃止すべきである」について、討議を始めます。まず、肯定側立論を始めて下さい。(原稿使用のため時間は指定しない。)

①肯定側立論(約3分)

司)ありがとうございました。続いて、否定側立論を始めて下さい。(同上)

②否定側立論(約3分)

司)ありがとうございました。これより、質疑のための作戦タイムを設けます。各チームとも、時間は3分です。審判は、両チームの立論について評価をお願いします。

③作戦タイム(3分)

司)時間です。各チーム、席に戻ってください。それでは、否定側質疑をお願いします。時間は2分です。

④否定側質疑(2分) ※状況により若干の延長は認める。

司)ありがとうございました。それでは、肯定側質疑をお願いします。時間は2分です。

⑤肯定側質疑(2分) ※状況により若干の延長は認める。

司)ありがとうございました。それでは、質疑を踏まえて、反駁の為の作戦タイムを設けます。各チームとも時間は3分です。審判は、両チームの質疑について評価をお願いします。

⑥作戦タイム(3分)

司)時間です。各チームとも席に戻ってください。それでは否定側反駁をお願いします。時間は3分です。

⑦否定側反駁(3分)

司)ありがとうございました。続いて肯定側反駁をお願いします。時間は3分です。

⑧肯定側反駁(3分)

司)ありがとうございました。それでは、これまでの経緯を踏まえ、各チームとも最終弁論のための作戦タイムを設けます。審判は、両チームの反駁について評価をお願いします。

⑨作戦タイム(3分)

司)時間です。各チームとも席に戻ってください。それでは、否定側最終弁論をお願いします。時間は3分です。

⑩否定側最終弁論(3分)

司)ありがとうございました。続いて、肯定側最終弁論をお願いします。時間は3分です。

⑪肯定側最終弁論(3分)

司)ありがとうございました。以上で、「日本は死刑制度を廃止すべきである」について、討議を終了します。肯定側、否定側の皆さんお疲れさまでした。審判は全体についての評価をまとめてください。時間は2分です。(様子を見て)それではジャッジを行います。肯定側の得点が上の方は挙手をお願いします。(計数)否定側の得点が上の方は挙手をお願いします。(計数)結果は〇〇側の勝利です。審判は、一人ずつ簡単な講評をお願いします。(※この段階で司会役の生徒は終了。指導者が引き継ぐ。)

ディベート論題：「日本は死刑制度を廃止すべきである」

年 組 番 氏名： _____

～判定表～

討論日：平成19年11月26日(月)IV限

肯定側・氏名：

否定側・氏名：

〈点数〉とてもよい—3点、ふつう—2点、努力が必要—1点

立論	評価基準	肯定側	否定側
	① 内容が理路整然としているか。	点	点
② 話し方や態度・表情は適切か。	点	点	
質疑	① 筋道の通った質問をしたか。	点	点
	② 質問のポイントは絞れていたか。	点	点
反駁	① 内容が理路整然としているか。	点	点
	② 話し方や態度・表情は適切か。	点	点
最終弁論	① 立論・質疑応答・反駁を踏まえているか。	点	点
	② 内容が理路整然としているか。	点	点
総合印象	① チームで協力し、一生懸命に取り組んだか。	点	点
	② ルールに従って誠実な態度で取り組んだか。	点	点
合計点数		点	点

☆ 納得したのはどちらの意見か、○で囲む。

【 肯定側 ・ 否定側 】

★ 判定理由を、わかりやすく書く。

受講者Cは、上記学習指導案の他に、フローシート（A4判1枚）と肯定側と否定側の立論（A4判4枚）を用意した。また、参考資料として、法務省の犯罪白書、新聞記事、専門家の意見（A4判2枚）などを紹介した。これらは、次の情報を引用したものである。

「<http://www.13.big.or.jp/~yokayama/Agora/shikei.pdf#search=deibe-to> ディベートアゴラ 死刑」より抜粋し、Cが編集したものである。本稿では、紙幅の都合で割愛した。

次に示すのは、英語科専攻の受講生Dが模擬授業で作成した学習指導案である。一部引用する。

〈意見を言い合おう〉

☆意見を言い合うときの表現って何がある？☆

自分の意見を述べる時

① I think + ~. (私は~だと思います。)

例) I think fall is better than spring.

(私は秋が春よりもよいと思います。)

相手の意見に賛成するとき

② I agree. (私は賛成です。) / I think so, too. (私もそう思います。)

相手の意見に反対するとき

③ I disagree. (私は反対です。) / I don't think so. (私はそう思いません。)

♪ディベートのパターンを練習してみよう♪

(1) 〈犬と猫〉

A: 「①犬は猫よりもいい。」

B: 「②賛成です。なぜなら ③犬は猫よりも役に立つと思います。④彼らは多くの人を助けています。」

C: 「⑤反対。なぜなら⑥私たちは毎日犬を散歩に連れて行かなければなりません。」

〈Dogs and Cats〉

A: ①Dogs _____ cats.

B: ②I _____, because ③I _____ dogs are _____ cats. ④They _____ a lot of _____

C: ⑤ I _____, because ⑥ we _____ our dogs every day.

Class ()-() No. () Name ()

☆自分の意見を英語で書いてみよう☆

テーマ：“Summer is better than winter.”



① The argument of the affirmative side (賛成意見)

例) I agree, because the washed clothes will soon dry in warm weather.

② The argument of the negative side (反対意見)

例) I disagree, because there are too many bugs in summer.

③ 今日のディベートの感想を書いてみよう♪

3 「ディベート」模擬授業の評価とその考察

以上、「ディベート」の授業を通して、その「定義」や「教育的意義」、「授業の展開法とその実際」「学習指導案の書き方」などを中心に論述してきた。ここで、「ディベート」の授業を振り返り、その反省と評価をふまえて考察をしておきたい。

本稿で紹介したのは、「高校生のアルバイトは認めるべきである」(高校2年生対象)という論題での「ディベート」授業の実際と「日本は死刑制度を廃止すべきである」(中学3年生対象)「ディベートを取り入れた英語科授業」(中学3年生対象)の学習指導案例であった。これら以外にも、受講生は、次のような論題での模擬授業に取り組んだ。一部紹介する。

- 日本は徴兵制を導入し軍隊を持つべきだ(中学3年生・社会科)
- 電車やバスの優先席はなくすべきである(中学2年生・道徳)
- 円周率はおよそ3でよい(中学3年生・数学科)
- 小学生にも携帯電話を持たせるべきである(高校2年生・国語科)
- すべての国が地球温暖化防止に取り組むべきである(高校3年生・ホームルーム)
- 少年事件の実名は報道すべきである(中学3年生・学級活動)
- 異性の心をつかむには電話より手紙にすべきである(高校1年生・ホームルーム)
- 人を愛するよりも愛されたほうがよい(高校3年生・ホームルーム)
- 愛国心教育は必要である(高校2年生・社会科)
- ホワイトデーのチョコレートは学校で渡してもよい(中学2年生・国語科)
- 小学校での英語は必要ではない(中学2年生・英語科)
- 高校のスポーツ特待生制度はやめるべきである(高校1年生・ホームルーム)
- クロウン技術の開発はやめるべきだ(高校2年生・理科)
- いじめの原因はいじめられている側にもある(中学1年生・道徳)等々。

次に示すのは、上記の「異性の心をつかむには電話より手紙にすべきである(高校1年生・ホームルーム)」の論題で模擬授業を行った際の判定者(審判団)の評価表の一部である。

ディベート評価シート

年 組〔氏名〕 ██████████
██████████ ██████████

	チェック内容	手紙派	電話派
		評価	評価
1	協力ができているか。	1-2-3-4- <u>5</u>	1-2- <u>3</u> -4-5
2	発言者がかたよっていないか。	1-2-3-4- <u>5</u>	1-2-3-4- <u>5</u>
3	相手の意見を聞くことができているか。	1-2-3-4- <u>5</u>	1-2-3-4- <u>5</u>
4	時間内にまとめることができているか。	1-2-3-4- <u>5</u>	1-2-3-4- <u>5</u>
5	個人を批判せず、論を批判できているか。	1-2-3-4- <u>5</u>	1-2-3-4- <u>5</u>
6	わかりやすい言葉で伝えることができているか。	1-2-3-4- <u>5</u>	1-2-3-4- <u>5</u>
7	質問と答えの内容がずれていないか。	1-2-3-4- <u>5</u>	1-2-3-4- <u>5</u>
8	いろいろな角度から考えた意見や質問をすることができているか。	1-2-3- <u>4</u> -5	1-2-3- <u>4</u> -5
		合計 39 点	合計 37 点

評価者として気づいたこと

両者とも、相手の意見に対しハッキリと明確に答えることができていた。後半、電話派の話し合いが足りなかった。手紙派は最終弁論で5つのポイントに絞り、電話派からの質問を抑えることができていた。

評価者は冷静な立場で両者の意見を判定してあげれば、はらばらしいで公正な視点を持つことが大切ですね!!

【採点基準】

5…良くてきている
4…できている
3…ふつう
2…あと一歩
1…頑張ろう

また、次に示すのは、筆者が作成し、毎時間配布する「相互評価表」の一部である。これは、上記の「円周率はおおよそ3でよい（中学3年生・数学科）」という論題でディベートを行った際のものである。

*** 相互評価表 (授業後に授業者に提出。その後、花田が読み、次時に返却。)**

第10講 (2008.6.19) 授業者: [redacted] 評価者: 年氏名 [redacted]	
評価の観点	評価 (○で囲む)
1 指導のねらい (学習目標) が十分に達成されているか	A (B) C D
2 指導の過程 (学習の展開) が十分に工夫されているか	A B C D
3 活動形態にふさわしい学習教材が選択されているか	(A) B C D
4 学習者の活動は十分に保証されているか	(A) B C D
5 授業者の発問・板書・助言・態度などは適切であるか	A (B) C D
* 授業者へのコメント (よかった点や改善すべき点を具体的に書く) ・数学をディベートにすると、主体的に考える力がつくと思います。なぜ3か(3.14か)という問いは、なぜ相似か、なぜ数学を学ぶかなど、 どの根元的な問いに結びついていて、良いと思いました。 ・はじめに全体に目を通して、発表者自身が立論をしっかりと理解する時間をとった方がよいと思います。 ・司会者が時間に正確になると、判定者が主観を入れずに判定すると、それぞれの発表者が本気で主張することなど、あらかじめポイントを指摘しておく、集中が高まると思います。	

4 第11講 (7月3日) の予告及び本時の評価と反省 (講義ノートに書く)

III 本授業の成果と課題

以上、「専門職大学院における『ディベート的討議演習』(その3)ーディベートの教育的有効性とその実際ー」について、実践報告を中心に論述してきた。最初の「要旨」でも述べたように、平成18年度から21年度(前期)に筆者が担当した「ディベート的討議演習」の授業から「ディベート」の内容に焦点化して報告した。

本授業全般に関する受講者の「授業から学んだこと」については、『教育総合研究』第1号(2008年度)のpp.61-62の拙稿を参照いただきたい。なお、平成18年度の受講者は11名、19年度は16名、20年度は11名、21年度は12名であった。

本授業の成果を整理すると次のようなことが言える。

- ディベート的討議演習に対する受講者のモチベーションが高まったこと。
- ディベートの基礎的知識や基本的な技法などを模擬授業を通して習得したこと。
- 道徳やホームルームや教科などで有効な活用法を開発したこと。

本授業で筆者が期待していた「論理的思考力の向上」「論理的表現力の向上」「認識力の進化・拡充」「有効な情報活用力」なども、おおむね受講者の身に付いたと考えている。それは、次のような受講生の授業評価からも伺うことができる。一部引用する。

- ディベートがどんなものか分かっていない学生に対して、知識としてだけでなく、実践を通して基本的な姿勢や考え方など、たくさんのことを教えていただきました。実際に指導する側になるためには、まだまだ勉強が必要ですが、楽しみながら学習できたことで、ディベートの授業に積極的に取り組むことができました。生徒の言語活動を活発にするためにも、ぜひ指導の中に取り入れていきたいと思います。
- 前期はディベートを中心とした理論を学び、後期はそれを実践するという形で、とても楽しく勉強になった。後半の模擬授業は、学生の個性がよく出ていて、授業に参加していてもよかった。
- ディベートは苦手だという思いがずっとあったのですが、この授業を受講して、「ディベートはおもしろいかも…」と思うようになりました。そして、先生が実践されたディベートの授業をいつか私もやってみたいと思うようになっていました。模擬授業からは、授業は生徒と先生が一緒に創り出すものであり、先生が楽しくなければ生徒も楽しくないのだということを実感しました。先生から「この授業で意味のある失敗をたくさんして、恥もたくさんかきなさい」と言われた言葉が大変嬉しく、勇気づけられ、模擬授業に挑戦する気持ちが高まりました。この授業は、私を成長させてくれました。ありがとうございます。
- 自分が経験したことのない討論法を生徒たちに教えることは困難です。さまざまな討議演習を体験することができて、大変勉強になりました。今後は、実際の現場で実践し、意欲的に挑戦していきたいと思います。

今後は、さらに多様な領域（総合的な学習の時間や生徒会の委員会活動など）での模擬授業の展開や論題の発掘や情報の収集法とその効果的な活用や有効な方法の開発に取り組んでいきたい。それはまた、現在及び将来にわたって学校教育に求められている「言語活動」の具体的な実践的研究課題でもあると考えるからにはほかならない。

なお、本紀要『教育総合研究』の第4号では「パネルディスカッション」を中心に実践報告をする予定である。

<引用文献および参考文献>

- 池田 修 (2008) 『中等教育におけるディベートの研究』 大学図書出版
- 魚住忠久 (1997) 『ディベート学習の考え方 進め方』 黎明書房
- 太田龍樹 (2006) 『ディベートの達人が教える説得する技術』 フォレスト出版
- 北岡俊明 (1990) 『ディベート能力の時代』 産能大学出版部
- 近藤 聡 (1997) 『反駁ゲームが楽しいディベート授業』 学事出版

- 鈴木良治(1994)『高校生のための国語科ディベート授業』明治図書
- 花田修一(2009)「活用型学力をどう育てるかーディベートで活用型学力を育てるー」『教育科学国語教育』明治図書 pp.117-121
- 花田修一(2009)「ディベート(d e b a t e)教育」日本教育大学院大学監修『教員免許更新講座テキストー教育現場のための理論と実践』昭和堂、pp.188-192
- 花田修一(2009)「専門職大学院におけるディベート的討議演習(その2)ーロールプレイングの教育的有効性とその実際ー」『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要 第2号』pp.97-111
- 花田修一(2008)「根拠を明らかにして論理的に述べる力をつけるー対人メソッドー教育ディベート技法」日本教育大学院大学監修『教師のための「教育メソッド」入門』教育評論社 pp.128-133
- 花田修一(2008)「専門職大学院におけるディベート的討議演習(その1)ーインナースピーチとペアトークの教育的有効性とその実際ー」『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要 第1号』pp.49-65
- 花田修一(1999)『「伝え合う力」とは何かーある国語教室からの発信ー』三省堂
- 花田修一(1997)『生きる力を育む「話し言葉」授業の改革』明治図書
- 花田修一(1994)『国語科ディベート授業入門』明治図書
- 松本道弘(1990)『やさしいディベート入門』中経出版
- 宮崎俊哉(1994)『ディベートで教師の力量を高める』明治図書
- 鷲田小弥太(2002)『大人のための議論作法』PHP研究所

Practice-based Report

Seminar on Debate and Deliberation at a Professional School (No.3):

Educational Effectiveness and the Practices of Debate

Hanada, Shuichi

This article describes some of the contents of a seminar on Debate and Deliberation, taught for four years during the 2006 to 2009 academic years. The seminar deals with (1) inner speech, (2) pair talk, (3) group discussion, (4) role-play, (5) debate, (6) panel discussion, and (7) symposium. This article focuses on the debate section.

Debate is translated as “argumentation” and “controversy.” Based on Aristotelian rhetoric, it was first used at Oxford and Cambridge Universities at the beginning of the 15th century and has become part of the required program for English politicians. In the United States, it was started in the late 19th century. In Japan, it started with debate contests in English, and inter-university debate contests started to be held after World War II. Debate has gradually spread into classes of Japanese, social studies, English, and ethics, because debate was found to be educationally effective in developing skills in logical thinking and logical expressions, as well as abilities to utilize information and materials—the skills that have been strongly demanded from school education over the past two decades.

This article documents how debate was taught in this seminar. Based on the analysis of students’ lecture notes and presentation handouts, this article aims to investigate the educational effectiveness of the methods used in the course and to contribute to the development of practice-based research on debate education at professional schools of education.

Key words: debate, language activities, logical thinking, logical expressions, abilities to utilize information
